

1 体育・保健体育科における「問いをもち、主体的に追求する姿」

体育における学習場面には、運動に向かおうとする場面、身体を動かす場面、よりよく運動していくための課題解決をしていく場面がある。場面ごとにまず、「やってみたい」という思いをもつことが必要となる。その思いは、子どもたちの追求欲求を刺激する教材との出会いや、仲間との学び合いによって引き出される。また、運動やスポーツが心身の発達に与える効果について運動の科学的知識を学ぶことも重要と考える。その上で、課題は何なのか、どうしたらうまくできそうか、動きを見合い、話し合うことで学習内容の核心である課題解決に向かっての仲間との学び合いが促される。下記は、小学校5年生タグラグビーのふりかえりである。

空いているスペースに動くことを意識してゲームをしたけど、3対3のときはボールをパスするつもりでふりをして、相手が向こうに行ったとき、空きスペースが出てきてそこで点が入ったので、見つけるにもいいけど、作るのもいいと思いました。
(児童 A)

児童 Aは空間を見付ける動きの中で、空間を作り出すことに目を向け始めており、次時以降の学習課題を設定するポイントとなった。自分のやりたいことや解決したい課題をはっきりともつことができれば、学び合いがチームの中で自然に生まれ、より高めていこうとする考えや動きが次々と出てくる。学び合いの積み重ねを通して、一人一人が「できる」につながる「わかる」を獲得していくことができる。その先には、自然と動き出したり、できるようになるために思考を巡らせたりする子どもの姿が表れ、さらなる「できる」を得ていくことであろう。

本学校園体育・保健体育科における問いとは、「やってみたい」という思いをもとに、どうするとよりよくできそうか課題を解決する方法を見いだしていく中で生まれていくものと考えている。その方法を実際に試していくことで、問いがさらに深まるとともに、発達段階に応じて動き方がわかるようになり、技能の向上も図られる。このように子どもたちが問いをもち主体的に追求する姿を次のように考えている。

- 身体を動かしたい、やってみたいと思う姿
- 運動の技能構造を追求し、考えている姿
- 仲間とともに追求しようとする姿
- 自分や仲間の姿を観察し、思ったことを言葉や身体をつかって伝える姿

2 「問いをもち、主体的に追求する姿」を求めて

保健体育科では問いをもち、主体的に追求する姿を求めて次の三つの手立てを実践する。

- (1) 付けたい力を明確にした学びをつなげる系統的な学習
- (2) 自身や集団の課題に対して問いをもち高めていく学び合い
- (3) 「やってみたい」「解決したい」という思いが連続する教師のはたらきかけ

(1) 付けたい力を明確にした学びをつなげる系統的な学習

学習の中で、過去の運動経験を生かすことで、子どもたちは学びをつなげ、力をつけていくことができる。ゴール型の運動を例に挙げると、養いたい力の一つに空間認識力がある。中学校2年生

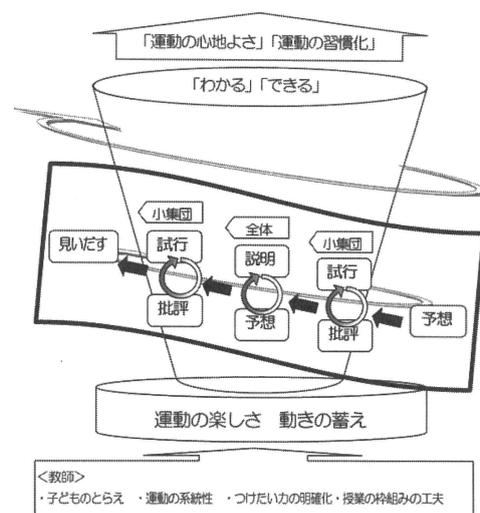
は空間認識力の中でも、空間を見付け、動くところに視点を当てた単元であるハンドボールを行った。友だちの動きやコート全体を観察して気付いたことを伝え合う中で、空いている空間を見付けて得点につなげる動きについて思考していくことができた。その学習を通して、次のようなふりかえりが出された。

相手にすぐにゴールを決められてしまっていたのですが、引き分けで終わることができました。私はハンドボールとバスケットボールが似ていると感じました。パスがあまりもらえなかったので、バスケットボールと同じように、自分が動く場所をちゃんと考えてプレーしたいと思いました。

中学校2年生の発達段階や経験を踏まえて、コート全体を見たことで、子どもたちは空いている空間を見付け、自分やチームの動きに取り入れようとしていた。付けたい力を明確にし、そのためにどのようなはたらきかけや学び合いをするのか工夫することで、子どもたちの学びは、より高まりを見せた。この学びが基盤となって他のゴール型の学習につながっていく。このような学習を積み重ねながら、自分に蓄えられていった経験を、さらに積み重ねていき、必要に応じて以前の単元や本単元で蓄えたものを引き出し、いかすことで、一人一人のもつ問いが、より洗練されたものになっていく。

(2) 自身や集団の課題に対して問いをもち高めていく学び合い

体育・保健体育科において、子どもたちの問いをもち追求する姿は、右図のように高まっていく。本学校園の体育の授業は、予想（前時のふりかえりをもとに）→1回目の試行・批評（小集団）→説明・予想（試行・批評をもとに学級全体で）→2回目の試行・批評（説明・予想をもとに）→見いだす（次の課題へ）という流れを大切にしている。このような学びの中で、特に小集団（ペアやグループ）での試行と批評が大切になる。それは、小集団において、次のような学び合う場面が考えられるからである。



- 出会った運動において、自分の考えを確かめるために試しに動いて、調整しながらよりよいものにしていく。(試行)
- 動きを見合うことで、互いの考えについて評価（アドバイス）し合い、見えにくかった自分やチームの動きを視覚化していくことで、よりよいものを求めている。(批評)

自分では見ることの難しい自分自身の動きを視覚化し、自分ができていること、できていないこと、また、そこから生まれる課題をもとに、技能を向上させていくことが大切になる。

(3) 「やってみたい」「解決したい」という思いが連続する教師のはたらきかけ

教師のはたらきかけがグループや全体での学び合いを深め、技能の習得においても重要となる。そこで、子どもが伝えたいことをより明確にし、全体が共有できるように考えを掘り下げることが必要である。また、これまでの子どもの思いや考え、知識と比較することやで思考をゆさぶったり、新しい考えを実感できたりするようなはたらきかけも効果がある。そこで、付けたい力をもとにふりかえりを工夫し、思考の変容をとらえたい。子どもの思いや考えを全体に表現・共有できる場を設定していくことで、次に自分たちが学びたいことを考えることができるようになる。このような学び合いの場面を意図的に設定することで、子どもたちの思考や判断が促され、次の「やってみたい」へとつながっている。その「やってみたい」という思いが、次の問いを生み、「解決したい」と追求していく子どもたちの姿を引き出す。

(文責 藤田 壮志)